

奈良盆地の聚落

西田與四郎

目次一、緒言 二、聚落の分布 三、聚落の形態・構造
a. 都市 b. 村落 附、参考文献

一、緒言

本論に入るに先だち、聚落研究の方法に關する卑見を一言する。

抑も聚落とは人類の住所即ち人家の集合體をいふのであるが、人家には稀には孤立的に散在して聚落を形づくものもあるが(註一)、之は特殊の場合であつて、通常は大小の聚落をつくる。その小なるものは通常村落とよばれ、大なるものは都市と呼ばれる。尙都市には市 town と町 town の區別がある。

村落と都市との區別は一見簡單の様であるが中々さうではない(註二)。米田博士が「都市とは

人口の比較的によく、且濃密なる、而して非農業的なる居住所である」(註三)、といつて居られるやうに、都市と村落の區別の標準は(一)聚落の大小即ち人口の多少、(二)住民の生業の二點によるのが適當であると考へる。(一)聚落の大小即ち人口の多少による區分は我が國の法制では二萬五千以上の人口を有し市制を布くところを市といふが、町と村とは人口上の區別なく、只人家集合して稍繁華なところは町制を布くことを許して之を町としてゐる。然し法制上の町の中には只一つの聚落のこともあれば、數個乃至十數個の聚落が散在してゐるものを一括して呼んでゐるものもあるから聚落研究上に注意を要する。奈良盆地内では前者の例では郡山町・田原本町等があり、後者の例では丹波市町・樺本町等

がある。後者の場合では、その主なる聚落のみが小商工業の中心で町の實を具へてゐるが、自餘の聚落は純然たる農村に過ぎないのである。

長屋氏は歐米では人口二千以上を都市とするが、我が國では人口五千以上を都市とするがよいと云つてゐる(註2)。

(二)生業の點より見ると、村は原始産業を生業とするところであつて、都市は商工業を生業とするところであるといつた方がよいと考へる。海岸や湖岸や山間などになると農業・漁業・林業・鑛業・牧畜業又はそれ等の二三雜つてゐる村もあるが、奈良盆地の村は純然たる農村である。

次に聚落の地理學的研究は如何にすべきか。

都市地理の研究法についての卑見は既に二三の雜誌に於て述べたところであるから(註4)、茲には再び説くことを止めるが、之を要約すると、都市地理では都市を地表の人文景 Kultur-landschaft として取扱ひ、其の地表に於ける分布 Distribution 並に其の形態 Morphology 構造

Hintergrund を論ずるにあること、恰も地形學に於て地形を論ずる場合の如くしようとするのである。

村落地理の研究法に於ても之と同一の態度をとるべきであると思ふ。村落地理に關する文獻は至つて少く、従つて其研究法も模範とするに足るものが少いが、ミルケの研究の如きは大體此の方針で進んでゐる(註5)。

之を要するに聚落地理の研究法は聚落を地表に於ける一の人文景として取扱ひ、其の地表に於ける分布並に形態・構造を論ずるにあると考へるのである。

私は以上の見地から、此の小篇に於て先づ奈良盆地内の聚落の分布を述べ、次に聚落の形態・構造を都市と村落に分ちて少しく記述して見やうと思ふ。

二、聚落の分布

奈良盆地内に於ける聚落の分布を見ると、小川博士も述べられたとおり(註6)、二三千戸乃至

七八十戸の集團をつくつた農村所謂集村 Hand-entown が殆んど同じ位の間隔(一杆内外)を置いて平野内に万遍に散布されてゐる様は、恰も満天に星が銀砂子をちりばめた様な状況である。そして盆地の周邊にあたつては大小の都市が並列してゐるに反し、盆地の中央には田原本以外に町がない。

以上の事實は二万分之一や五万分之一地形圖によつて直ちに觀察し得ることであるが、これは人口分布上の研究とも一致するのである。

奈良盆地の人口分布については石井理學士の精細な研究がある(註7)。氏の計算によると

(1)、中央地域 (三〇—五〇米)	面積 人口密度(一万里)
(2)、中間地域 (五〇米—周邊の鐵道線路)	五、九三三 二〇、七五
(3)、周邊地域 (周邊の鐵道線路—一〇〇米)	九、九六 六、二三

といふ結果を得た。(2)の地域が(1)の地域より人口密度稍小なるは其の地域内に馬見丘陵(約八十米の丘陵で面積一・二三万里)を含むからである。仍て大體から見ると平野を二つの地域に分

けて考へてもよい。即ち(1)(2)を一つの地域と見て、その人口密度は平均一万里約一万八餘(一方杆約六五〇人)である、周邊地域は約その二倍の人口密度であるといふことが出来る。勿論石井學士の此の計算は大正九年の第一回國勢調査の結果に基いたものであるが、大正十四年の第二回國勢調査の結果によつて計算しても此の大量觀察には影響しない。何となれば奈良縣の人口密度はこの五年間に一万里約八三人の増加を示すに過ぎないからである。

以上の如く盆地の中部には同じ位の大きさの農村が一樣に分布して人口稍疎に、周邊地域にも農村は一樣に分布してゐるが、そこにはその外に都市が並列して居るために人口密なる部分を生じたのであるが、この分布を生じたる原因如何。

これを自然的原因と人文的原因との二方面から考察する。

自然的原因としては盆地の地形が主因である。奈良盆地は南北最廣部約三十杆、東西最廣

部約十六杆、面積約二九三方杆（十九方里）の菱形をなす斷層盆地で、その地形は周邊海拔約百米より中央部（約三十米）に向つて緩斜して居る極めて單調な起伏殆んどなき平野で、只南邊に耳成（ミミナ）トロイデ（一四〇米）と、西邊に前述の馬見丘陵の孤立して此の單調を破るのみである。而も最低部と雖も卑濕な處少く、二毛作の行はれぬ土地即ち常に水田になつてゐるところは非常に少い。それで聚落は到るところに之をつくることが出来るのである。

人文的原因としては此の盆地に於ける人類居住の歴史の古いことである。神武天皇以前から茲に人類が若干居住してゐたことは盆地内の石器時代の遺跡等からも推察出来るのであるが、（註8）、神武天皇以後久しく我が國文化の中心地域であつたため戸口の密集して來たことはいふまでもない。従つて盆地内の戸口は久しき以前から飽和状態にあつたことも疑なき事實である（註9）。徳川時代以前には詳細な大和の古地圖がないので聚落分布の正確な状況を知ること

が出来ないが、徳川時代の大和の地圖類（正保三年のもの）が私の囑目した最古のものである（註10）を見ると現在と殆んど同一の分布状態を示して居るのである。最近に於ける二回の國勢調査の結果を比較して見てもその戸口は殆んど大なる變化はない。若干増加するところもあるが又減少しつゝあるところもある。試にその二三を掲げて見やう。但左表中、村とあるは行政上の村で、その中に數個乃至十數個の大字が含まれ、その各大字は多くは別々の聚落をつくるが、時には一大字が二三の聚落に分れてゐることもある。又稀には二三の大字が連續した聚落になつて居ることもある。

郡	村（大字）	大正九年（註11） 世帯（人口）		大正十年（註12） 世帯（人口）	
		世帯	人口	世帯	人口
添上	平和（八）	四三（二三三）	四三（二三三）	四三（二三三）	四三（二三三）
全	大安寺（三）	四三（二三三）	四三（二三三）	四三（二三三）	四三（二三三）
山邊	朝和（四）	九三（四七五）	九三（四七五）	九三（四七五）	九三（四七五）
磯城	耳成（三）	八七（四六七）	八七（四六七）	八七（四六七）	八七（四六七）
全	川東（三）	一三七（六四七）	一三七（六四七）	一三七（六四七）	一三七（六四七）

高市	飛島(八)	二五(四九)	三五(四九)
南葛城	大正(八)	二五(五三)	二三(四四)
北葛城	陵西(五)	二五(五三)	二五(五三)
生駒	筒井(五)	二五(五三)	二五(五三)
全	本多(四)	二五(五三)	二五(五三)

盆地内の村落は何れも純農村で、其の四周に各目の耕地をもつてゐる。其の土地所有權は他の部落の人の所有のものもあるが、その村民が之を小作してゐる。であるから農村の聚落の大小に従つてその周囲の耕地の大小があるから、稍大きな農村があると隣の農村との間の距離が稍大きく、稍小さい農村の場合には之に反し隣

村との間隔が稍小さい。かくの如くいくらか不規則の間隔を各農村聚落間にもつては居るが、その聚落の大きさに大差ないことから、割合規則正しい間隔を以て各聚落は一樣に散布してゐるのである。各聚落の大きさが殆んど同一で一樣に散布してゐる原因に至つては今俄に斷定する材料を持たぬが、恐らく上古の班田條里制が平野に行はれたことに由來して農村が散在することとなつたものではあるまいか。

次に周邊地域に農村の間に特に都市の並列する理由如何。

先づ盆地周邊の都市を北から右廻りに列舉すると次の如くである。

大さの順位	市名	(附屬農村數)	大正九年(註11)世帯(人口)	大正十四年(註12)世帯(人口)	増加率(大正九年の分を100とす)世帯(人口)	發達の順位
1	奈良市	(一)	八、七四四(四〇、一四〇)	一〇、七七一(四六、六七)	二九(三三)	1
7	橿原市	(五)	一〇、四四一(五一、一七)	一三、一三三(五七、四二)	五〇(一〇五)	9
4	丹波市	(一九)	一、五七六(四〇、一〇)	二、四四一(六一、三二)	五七(五七)	3
15	柳本町	(一)	四、九七一(二二、八三)	五、七〇七(二二、九四)	一四(一四)	10

14	2	13	10	6	8	3	11	9	5	12
田原町	郡山町	龍田町	王寺町	御所町	新庄町	高田町	今井町	八木町	櫻井町	三輪町
(〇)	(〇)	(六)	(一)	(〇)	(一四)	(三)	(一)	(〇)	(二)	(二)
五七	二、九六	六八	六八	一、三三	九三	二、八二	七五	八九	一、三四	七三
(二、六三)	(三、一三)	(三、六四)	(三、六三)	(五、四六)	(五、一〇)	(二、七九)	(三、五二)	(四、二二)	(六、三九)	(三、六五)
六九	三、四三	七八	八〇	一、七五	一、〇五	二、四九	七六	八九	一、四三	七三
(三、八七)	(一、六、元〇)	(三、七三)	(三、八〇)	(五、九八)	(五、七七)	(三、九一)	(三、六七)	(四、二六)	(六、七五)	(三、八二)
二九	二五	二〇	二六	二二	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
(一〇、八)	(二、四)	(一〇、一)	(二、九)	(一〇、九)	(一〇、一)	(一〇、八)	(一〇、四)	(一〇、六)	(一〇、五)	(一〇、六)
7	4	12	2	5	14	6	15	13	8	11

○右表中附屬農村數とあるは、前に述べた如く行政上の一町が全部一の都市となつてゐるものと、行政上の町は一の都市と附屬の大字(農村)とより成るものとがあるから、之を區別する爲めに大字數で農村を示したのである。この大字中には一個の聚落の場合と、二個以上の聚落の場合と、稀には二字連續するものとあることは前の農村の表の場合に同じ。奈良市も法華寺といふ一の純農村をもつてゐる。尚王寺町は大正十五年二月十一日より町となつたものである。大さの順位は大正十四年の世帯數の順位で、發達の順位は五年間に都市世帯數の増加率の順位で、同指數のもの

は人口増加率の大なるものを上位とした。後者によつて都市の活動力を卜ることが出来る。中奈良市のみは佐保村(大正九年の世帯三二二、人口一四八七)を合併したから増加率が稍大となつてゐるのが、之を考の中に入れると、第二位である。

以上一市十四町中、田原本町以外は凡て盆地の周邊に存在するのである。何故にかゝる位置にあるかを考ふるに、一般に山麓帶即ち平野と山地との接觸地帯は人口密度が多いのである。

それは住居を構ふるにあたり種々の便利があるからである。飲料水のよいこと、土地の高燥なこと、平野・山地兩者より生活資料の得易きこと等である。従つて山麓地帯には都市發生の可能性が大きい。今奈良盆地について見ると、盆地の北端高燥の地に南面してつくられた平城京の東への延長である奈良市が盆地の東北隅を占めてゐるのは、平城京遷都後、山麓に残つた東大寺・興福寺・元興寺等の門前町から發達した爲である(註13)。又郡山町は西北の方にある西ノ京丘陵地の先端郡山城の城下町として發達したものである(註14)。盆地の南邊にある今井町は足利時代の末に一向宗の僧侶兵部なるものが、四町四方に堀を巡らし土手を築き、内に町割をつくつたものである(註15)。東邊の丹波市町の一部をなす大字三島^{ミシマ}附近は天理教本部の所在地なるが爲にそこに四十年來宗教都市を出現し大字丹波市の聚落はその北部に於て擴大しつつある。

以上の外の都市は何れも街村 *Strassendorf* の發達したものに過ぎない。それは何れも山麓を

通ずる道路に沿ふて延びて居るのである。而して何れも谷の出口にあたつて居る。即ちヒンターランドとして山地部をひかへて居るところに出來た市街である。

盆地の中央にある田原本町も盆地の中央を南北走する中街道に沿うて出來た市街である。

三、聚落の形態・構造

a. 都 市

盆地内の都市一市十四町の形態を述べると、奈良市・郡山町・今井町及び丹波市町の一部(大字三島附近)以外は街村式の聚落といふべきであつて、何れも主要道路に沿うて細長い市街をつくり、又櫻井町・八木町の如く道路の交叉するところでは十字形の市街をつくつてゐるものもある。

奈良市の形態・構造については既に一小篇を公にしたから(註13)、茲には再び詳説することを省くが、要するに奈良市は前節にも一言した如く、平城京の京東班田の條里の上に東大寺・興福

寺・元興寺等の門前町として起こり條里と、街路と多くは一致するから、街路は碁盤目狀をなして居るのである。これが市の胴部 Rumpf に當るところで、この胴部から四方に肢節 Gliederung が出てゐるのは、他方と結ぶ道路上に市街が延びたからである。そして此の形態の完成したのは恐らく徳川時代の初期であつた。奈良の古圖(寛文六年版)を見ると今日と市街の輪廓が殆んど同じであつて、只近年の鐵道交通の發達は市西の奈良驛や市南の京終驛附近に工場や住宅が若干増加し、又市の西北部に學校や住宅、市の東南部の兵營や住宅が若干増加した點が、市の形態の外的擴張の主なるものである。

郡山町は永祿年間小田切春次が西ノ京丘陵の先端に城を構へ後、天正十三年豊臣秀長は百萬石の居城として(註14)、城廓を擴張したが、その後にはこの城廓の主要部のみが居城として明治維新に至り、秀長時代の城の外廓の部分は市街地となつて居つた。これは二万分之一地形圖によつて、その外濠が市街の中にあることを直ちに

知り得るのである。即ち郡山は城下町で城の東南部即ち丘陵の下の平地に出來た市街で、主要交通路の方向に肢節が延びて居るが、主要部分の街衢は東西・南北の二線の組合せから成つてゐるのである。この町の主要部分は徳川時代の初期に現今とほぼ同じ形態をとつたが、鐵道や電車の開通によつて、紡績工場が停車場の西北方に出來、住宅が舊城址の丘陵の方面に若干増しつゝある。

今井町は前節に述べた様に足利の季世に向僧の城寨としてその中に町割をつくつたものであるが(註15)、現今の町の形は四町四方でなくて東西は約四町あるが南北は稍小さい。しかし大體もとの形を殘して居る。現今最も沈滞した町であることは前節の表に示す通りである。

丹波市町の内、大字丹波市の市街は上街道に出來たもので大體は、少くも徳川時代からの形態のまゝであるが、その東北につゞく大字三島の附近は信徒五百萬と稱する天理教本部の所在地で、前節に述べたやうに、門前町が神殿を中

心にして四方に擴がりつゝあつて、二萬分一地形圖などは大なる修正を要するやうになつてゐる。

以上の諸都市及びその以外の都市即ち一市十町凡てを通じて街路の方向は概ね東西線と南北線の結合であることは條里制の影響が主因であると考へられる。

b. 村落

盆地内の村落の形態は前節に述べたやうに殆んど凡て集村であつて、恰も市街の一部を切はなしたと變りはない。そしてやはり條里制の影響で村落内の街路は都市の場合と同じく大抵東西線・南北線の組合せからなつてゐる。

何故にかくの如き集村をつくるに至つたかの原因に至つては今俄かに斷定し難いが、その主因は人口に比して耕地の少いといふ經濟上の原因に基くことであらう。

茲に一言して置きたいことは垣内カイトなる語の用法である。垣内なる語は現在法制上の最小單位たる村の下に大字なるものがあつて、その大

字は一の聚落であることもあるし、二三の聚落の總稱であることもある。この大字が一の聚落である場合、その聚落内は通常二三の垣内に分れてゐる。大字が二三の聚落の總稱である場合は、各聚落は一の垣内であることも時とすると二三の垣内であることもある。要するに垣内とは村の小分の大字の更に小分されたもので、盆地内の凡ての村には垣内のない處は殆んどない。従つて小川博士の云はるゝ(註6)、垣内式の村落なる語の使用については、只稗田・井戸野等の濫をめぐらしたものに限定するのも一方法であるが、そしてその起原は博士の言の如く大陸の影響であつたであらうが、現今の垣内なる語の使用法は以上述べた如くである。

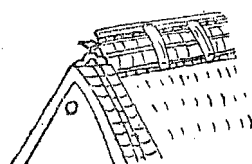
次に村落の構造について一言する。

前に述べた様に村落は市街の一部と大體の構造を同じくしてゐるが、各家の間口は市街地よりも割合に廣くなつて中流以上の家は土塀を以て隣地との界をつくる。そして市街地は大部分屋根は切妻又は入母屋造の瓦葺で多くは木造平

屋建であるが、農村は瓦葺は數十戸の各聚落中の一割位で、残りの八割位は藁葺で、一割位は藁葺と瓦葺との折衷式のもので、之に箱棟と高塀の二種がある。瓦葺や箱棟・高塀の屋根を持つ家は村落中の中流以上の家で、藁葺の家は下層の農民である。茅葺屋根は盆地内では殆んどない。これは藁(麥又は稻の藁)の方がその材料が得やすいからである。藁葺は我が國に行はるゝ三種の形式即ち(1)切妻造(2)寄棟造(3)入母屋造の内、奈良盆地内では(1)(3)の二種が行はれ(2)の形式は存在しない。關野博士によると(註16)、切妻造は大和の外、甲斐・信濃の一部、會津地方に行はれるだけで、入母屋造は京都を中心として、東は尾張・美濃・越中、西は出雲・安藝に及んでゐるといふことである。棟には兩者とも奇數(普通五又は七)の鯉木形に藁をたばね、時には杉皮をその上に巻いたものを置いて屋根を堅固にして居る。奈良盆地では入母屋造よりも切妻の方が遙に多い。

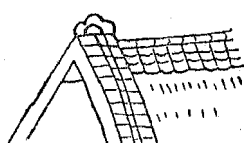
高塀については關野博士の簡單な圖解(註16)、

奈良盆地の聚落



第一圖 高塀

棟又杉檜皮で破竹ひ押へる

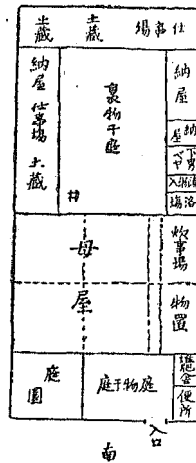


第二圖 箱棟

があるが、藁屋根の兩切妻を土で塗つて瓦葺としたもので、箱棟はこの外更に棟の部分だけ瓦葺にしたものである(第一圖・第二圖)この形式は盆地殆んど特有の形式とも云ふべく外には山城・河内に若干あるのみの様である。農家は藁葺でも高塀でも箱棟でも、何れも住居するのは下の方だけで屋根裏は「ツシ」と呼ばれて物置になつてゐるのである。

次に農家各戸の構造をいふと圖の如き建物の配置をとるのが普通である。これは中流の農家の住宅のプランを概念的に示したものである。建物の主要部をなす母屋(モヤ)の中にしてその前後に物干庭と、その物干庭をとりまく附屬建物とか

ら成つてゐる。母屋は普通四間に仕切られ、表の物干庭の一方には便所や堆肥場、稀には牛小屋も附屬する。但近年牛の使用は減少した。裏の物干庭の周圍には土藏や土間の仕事部屋・物



圖三第
ンラブの家農

置などがある。この數はその家の富の程度によつて増減する。米麥の收穫期には粃や麥穂を此の物干庭で筵の上に干す。平時は不用のものである。貧しい農家では只母屋と前の物干庭と其の兩側又は片側に便所・物置・仕事部屋等の附屬建物有するのみである。

今は奈良市の一部に併合された市の西北部の法蓮の農家は一風變つてゐるものであるが、しかし以上の一般の農家のプランが稍變つただけである。法蓮では表の物干庭の前方道路に面し

て便所と堆肥小屋とがあつて、それが隣のものと並んで、其の各の間の小徑から母屋に出入する。この表の物干庭は隣家のものとの間の界がなくて、平時はここも通路になる。母屋及び裏の物干庭及その周圍の建物は大概一般農家のものと似て居る。只奥行の割合に間口の狭いことは奈良市その他の市街地の場合の様である。法蓮及その西の法華寺（これも今は奈良市の一部であるが、これは純農村で孤立した一つの集村である）の農家の圖は今氏の著書に示されてゐる（註17）。

農村の各聚落は以上の如き大小の農家から成る外、大抵神社と寺院と集會所とをもつ。時には小學校もその一部分をなすことがある。農村の寺院の瓦葺の大家屋と、その村の起原を語る檜皮葺の神社をつむ森と、時には小學校の大きな瓦葺と、それに交つて、それよりも小さな藁葺の多數と瓦葺や箱棟・高塀の家の小數の人家の集合が、全盆地の農村の景觀を象徵するものである。

参考文献

- 註1、小川琢治、越中西部の莊宅について（地學雜誌、大正三年十二月）
- 2、長尾敏郎、都市の發達と人口都市集中の諸相（都市問題第二卷第一號、大正十五年一月）
- 3、米田庄太郎、現代心理と現代文明（大正九年）
- 4、西田興四郎、都市地理の研究法（地理教材研究第六輯、大正十四年五月）
- 全 支那の都市（地理學評論、大正十四年九月）
- 全 都市の研究と教授（地理教育、大正十五年三月）
- 5、Milke : Das Dorf (1910)
" : Das deutsche Dorf (3. Aufl. 1920)
- 6、小川琢治、近畿地方の土地と住民（大正四年）
- 7、石井逸太郎、奈良盆地の人口分布に就きて（地理教材研究第五輯、大正十三年十一月）
- 8、鳥居龍藏、有史以前の日本（大正十四年）
- 9、奈良盆地の中央部の人口密度 一方約五六〇人をラツツホルの示す人口密度表 (Raizel : Anthropogeographie II. 2. Aufl. S. 173) と比べると、丁度歐羅巴式農業を營む土地の民族又は氣候不其地方の歐洲民族の人口密度より稍大で中央歐羅巴の純農業地の人口密度よりは小である。
- 10、大和國大繪圖（巾十尺、長十六尺）（正保三年本多内記

奈良盆地の聚落

家來の實査で、寶永三年本多侯に上りしものの控を享保四年に寫せるもの、王寺町、保井芳太郎氏藏）

- 11、國勢調査速報（大正九年）
- 12、全 上 （大正十四年）
- 13、西田興四郎、奈良市（地理教材研究第三輯、大正十二年四月）
- 14、關祖衡、大和志（享保廿一年）
- 15、和州軍記
- 16、關野貞、草葺居根（同文館、工業大辭書卷二）
- 17、今和次郎、日本の民家（大正十一年）

——大正一四、二、二八日稿——

○兵庫縣養父郡大杉さんづの踊

八月十六日の氏神祭禮に三四十人の踊子がシャガマを頭に冠り着物の裾をからけて足は脚絆やわらちで固め障がけて腹に大鼓をつける、大鼓の兩脇に竹を差込み其一端を腰の帶に差し、其竹の先に色紙の短冊を多くつける、兩手に撥をもち、それにも色紙の刻んだのがつけてある。中踊四人は大きな團扇形の竹を負ふてゐる、これにも色紙がはつてある。新發意といふのが一人軍配團扇で陣笠つけて中央で音頭をとる。踊りの種類は十三種、一月前から稽古する。この踊は江州伊香郡の大鼓踊に類似したもので、何だか戰國時代からの餘韻らしく思ひます。（藤田報）